

# V.P.ダニーロフ 再読 ―批判的継承に向けて― (Ⅱ)

西山克典

## V.P.ダニーロフ 再読 — 批判的継承に向けて — (II)

西山克典

はじめに

- I. ヴィクトル・ペトローヴィチ・ダニーロフの経歴
  - II. 対抗 — 歴史学における反スターリン主義の闘い
  - III. 敗退 — ソヴェト史学の転換 以上 (第9巻 第2号)
  - IV. 「復権」から守衛へ — ペレストロイカのなかで —
  - V. 最後の闘い
  - VI. 農業改革への批判 以上 本号
  - VII. 研究活動と「政治」
  - VIII. 遺稿の内容
- 結びにかえて

### IV. 「復権」から守衛へ — ペレストロイカのなかで —

1985年3月にゴルバチョフが共産党書記長に選出され、ブレジネフ期の「停滞の時代」からの脱却を目指して「ペレストロイカ」が始まった。歴史学においても革新を求める声が主張されはじめ、これは革命70周年を迎える1987年に一気に加勢して現れることになった。

社会評論の分野ではグラスノスチと検閲の緩和が先行していたが、Ю.アフアナシエフが、この年の『モスクワ・ニュース』1月11日号に歴史学界批判の文章をよせ、世界的な水準からの遅れと「停滞的」状況を指摘し、史学方法論上の探求が「暴力的介入によって中断された」と指摘し、70年代に中断された方法論の再興を求めた。この遅れと停滞の原因として、彼は方法論にかかわる問題と社会的原因を挙げ、歴史学の方法論においてはアジア的生産様式論争の中止とともに、「多ウクライド性」の研究について、次のように述べた。「60年代後半から70年代初めに展開した方法論をめぐる探求は、十月革命の史学にも触れるものであった。(中略) とくに多ウクライド

性の問題を基礎とした研究は、ここでは人為的に中断されることになった。これを境に、十月革命以前の社会経済発展の性格は「学術研究により解決済みの」問題とみなされ、したがって、あらゆる論争は時宜を得ないとされたのである。」彼は、1985年4月に我々の社会に訪れた春はすべての生活分野で感じられるとし「今のところ徐々にではあるとはいえ、歴史家たちも目覚めつつある。やはり、自然の法則に基づく春は避けがたい現象である」と結び、歴史学におけるペレストロイカの開始を、十月革命70周年を迎えるなかで伝えたのである。<sup>1</sup> つづいて彼のインタビュー記事が『ソヴェト文化』紙の3月21日号に掲載され、彼は、ここでも60年代に生まれた「新傾向」を擁護し、70年代初めに革命前のロシアの「多ウクラード性」の理論的探求が、その方向全体が破壊されたことを指摘し、スターリン批判の研究の進展を求めたのである。<sup>2</sup>

このアフアナシエフへの、とりわけ彼の「多ウクラード性」への評価に対し、反論が7月4日付けの同紙にヴァガーノフとポノマリョフの連名でだされた。この反論に対しては、さらに同紙7月9日付けで直ちにポリカルポフの批判が載った。<sup>3</sup>

こうして一般紙での歴史学の革新への呼びかけと並行して、学会でも動きがはじまった。歴史学におけるペレストロイカへの動きは、この年2月のカザンでの学術会議ではじまる。1987年2月のカザン会議は、まさに、学術研究の分野における70年代に中断された研究の再興のきっかけとなった。それは、科学アカデミー学術会議議長ミンツの発言と総括にあらわれていたが（彼はソヴェト歴史学の変化に巧みに適応してきた学者でもあった<sup>4</sup>）、むしろ、そこでのタルノフスキーの報告によってであった。タルノフスキーは、この会議で「十月の前提：問題の研究における若干の総括」を報告し、ロシアにおける資本主義の型の問題と革命の性格との関連を述べ、60年代から70年代にかけて検討されたロシア資本主義の発展の型の問題が「人為的に」止められ、革命の前提の解釈において「深刻な遅れ」が生じたと主張した。また、この会議で、ポリカルポフ В. Д. は、最近20年間、そして今も克服されていない十月革命と内戦史の研究の評価に対する「行政的横暴」に注意を向け、学者の「倫理的状況」の「健全化」の必要性を訴えている。このカザン会議では6項目の提言がなされたが、その第

1 Юрий Афанасьев. Энергия исторического знания. «Московские новости», №2, 11 января 1987 г. 和田春樹、『私の見たペレストロイカ—ゴルバチョフ時代のモスクワ—』岩波新書、1987年、116-117頁。

2 Ю. А. Афанасьев, "С позиций правды и реализма", «Советская культура», 21-го марта 1987 г.

3 和田春樹、『私の見たペレストロイカ』、117-8頁。Ф. М. Ваганов, А. Н. Пономарев, Не идеализовать, но и не драматизировать. «Советская культура», 4 июля 1987 г.; В. Поликарпов, О "дискуссиях" минувших лет. «Советская культура», 9 июля 1987 г.

4 Минツは、戦間期にボクロフスキー批判により成立するスターリン史学の一翼を担ったが、ユダヤ人でもある彼は、第二次大戦後のコスモポリタニズム批判と反ユダヤ主義の風潮のなかで苦境に立たされる。だが、この批判を受け入れ巧みに学者としての社会的危機を脱した。1948-49の戦後ソ連歴史学におけるコスモポリタニズム批判とミンツへの批判、戦後のスターリン史学の再興については、次を参照。和田春樹「戦後ソ連における歴史家と歴史学—ソ連史学史ノート（その一）—」『ロシア史研究』25号（1976年6月）、5,16-17,25, 27,29,31-32頁。

3項は学術会議のなかに「大十月社会主義革命の歴史的前提」部会を再建し、「70年代に中断された、この問題の一連の側面の検討」を再開すると述べていた。さらに第6項では、今後の学術会議では社会主義革命の「人道的で民主的な性格」を審議することが指摘された。<sup>5</sup> この提言は、70年代初めに中断された、「新傾向」派の「多ウクラード性」に基づく革命研究の解禁を認めるものであった。

しかし、このカザン会議でのタルノフスキーの主張から歴史学の動きが急速に展開したわけではない。3月9日に開かれたソ連科学アカデミー歴史部会の会議では、アカデミー通信会員のB.B.ヴォロブーフが何人かの名を挙げながら歴史学の現状を厳しく批判した。しかし、彼の声は孤立しており、他方で学会では「管理行政者たち администраторы」の「ペレストロイカを急くことはない」という雰囲気は瀰漫していたのである。<sup>6</sup>

このような歴史学のペレストロイカへの駆動のなかで、ダニーロフも登場することになる。翌年1月8日に、『歴史の諸問題』誌の編集部は「ペレストロイカの状況における歴史学」をテーマにした円卓会議を主催している。この会議では、ソ連を代表する研究者が、それぞれの研究分野からソヴェト史学の抱える問題と課題を自由に「円卓」の形式をもって提起している。このなかで、ダニーロフはヴォロブーフとともに嘗ての「新傾向」の復権と新たな研究の推進を主張している。ダニーロフはここで「第三の波」と題して発言しているが、それは、1920年代の研究、第20回党大会でのスターリン批判と以降の歴史学、そしてペレストロイカのなかで第三の新しい「歴史過程に関する学術的認識の成長の波」が生じたとの認識に基づいている。そして、この第三の波のなかで、イデオロギー的な「浸食 размывание」と「擬似科学 псевдонаука」への闘いがなされているとした。<sup>7</sup>

ダニーロフはこの報告のなかで第三の波として新しい歴史学の生成に期待をかけるとともに、ペレストロイカの「グラスノスチ」の始まりとともに現れてきた「偽りの歴史的判断」に警告を発し、それを解消できずに歴史学が社会の新しい展開に遅れをとっていることを指摘した。その例として「ストルィピンの選択肢」を挙げ、そこ

5 В научных советах АН СССР. Всесоюзная конференция «Великий Октябрь и гражданская война. Исторический опыт и современность», «Вопросы истории», 1987, №10, С.116-7, 118. この会議で発言したヴァシーリー・ドミートリエヴィチ・ポリカルポフ В.Д. (1918-) は内戦史の研究者である。タルノフスキーの弟子で「新傾向」の研究を逸早く進め再評価したヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・ポリカルポフ В.В. (1945-) とは別人で、この内戦史の研究者 В.Д. Поликарпов の息子とおもえる。

6 Ю.А. Афанасьев, "С позиций правды и реализма", С.3. ここで、アフアナシエフが「管理行政者」として想定しているのはアカデミー会員で歴史部会書記チフヴィンスキー С.Л. Тихвинский らの動きである。書記チフヴィンスキーは「だがしかし、ペレストロイカを口実に、歴史学すべてを黒く塗りつぶすようなことを許してはならない」と、述べていたのである。

7 "Круглый стол": историческая наука в условиях перестройки. «Вопросы истории», 1988, №3. С.21. この円卓会議では、ダニーロフの「三つの波」の認識とは異なる見解も出されている。シェレストフ Д.К. Шелестов は、1920年代、そして60年代を通じて一貫してスターリン主義のドグマが基調をなしていたと主張していた。 Там же, С.34-35.

では革命前のロシアの社会経済発展が極めて単純化されて解釈され、農業資本主義の水準が極めて高いものとされていると批判する。そして、70年代初めに「新傾向」に、とくにロシア経済の「多ウクラード性」の研究に批判が向けられた背景に注意を促した。そして、彼は、このような状況から1917年10月の農民革命が社会主義革命に合流したことへの「無理解」が生じると指摘したのである。<sup>8</sup>

ダニーロフは過去についての誤った判断が生まれ広まっていく背景に、現状への人々の不満があり、これが過去の理想化やノスタルジー的感情を生むと指摘し、同時に歴史家が60年代半ばから80年代半ばまでの20年間、「最も焦眉の問題」を回避してきたことにも責任があると問う。ここには、60年代半ばから80年代半ばまでになされたダニーロフらの農業集団化研究への抑圧が示唆されている。

彼は、この「広まった偽りの判断」には「オールタナティヴ（選択肢）」という問題が関連しており、革命、ネップ、集団化という三つの事象が問われているとする。歴史に仮定法はないといわれるけれども、単に成立したものだけでなく、成し遂げられなかったことの分析と評価も求められており、「そうしなければ歴史は何か神秘的な性格をおび、それに従事することは意味を失ってしまうであろう」と指摘したのである。このオールタナティヴ論の観点から、彼は社会の特別な関心の向けられている20年代末-30年代初めの農業集団化の問題をとりあげ、スターリンの成型（ヴァリアント）に対する他の可能性を論じ、このようなオールタナティヴ論がソヴェト史学の革新をはかる最も重要な方向のひとつであると、自らの発言を結んでいた。<sup>9</sup>

ヴォロブーエフも、この円卓会議で「歴史学に新しい方法を確立する」と題して、発言している。彼は、1972-73年のソ連歴史学の転換とそこでの攻撃の矢面にたたされていたが、ここで、彼は、歴史学を含めた社会科学の「停滞現象」の原因としていくつかの点を指摘している。まず、祖国史の「粉飾 приукрашивание」が極端になされ、マルクス主義とは無縁な「似非<sup>экс</sup>パトリオティズム лжепатриотизм」が広がったこと、第二に歴史発展のロシア型をヨーロッパ・モデルに「追いつかせる подогнать」ことがなされ、ロシア絶対主義の解釈、資本主義の発展の水準が引き上げられ、「多ウクラード性」とロシア資本主義の類型論 типологияが禁止されたと指摘した。ここでは「ヨーロッパ中心主義の視点」が批判された。ヴォロブーエフが、第三に挙げたのは、社会の法則性についての理解がマルクス主義とは無縁な「目的論 телеология」や厳格な決定論 детерминизмと自動論 автоматизмまで歪められ、そして、そこからの脱却として「オールタナティヴ」論が提起されたと述べる。さらに、彼は1987年の十月革命70周年に際して歴史家の活動が不十分であり、広範な読者の

<sup>8</sup> Там же, С.22.

<sup>9</sup> Там же, С.23-24.このオールタナティヴ論のなかで、チャヤーノフの理論と思想の評価、ブハーリンの名誉回復と彼の選択肢、さらに最初の五ヵ年計画の策定での方針、トロツキーらの方針まで排除されるものではないと、ダニーロフは指摘している。Там же.

「歴史的文盲」が明らかになったとし、この「歴史的文盲」への責任は歴史家にあるとし、最後に「ダニーロフが正しく述べたように、過去から少なからず残されている多くの反歴史的概念を克服することも必要である」と指摘し、『歴史の諸問題』誌が歴史学でのグラスノスチと民主化を求め、同誌が歴史学のペレストロイカの梃子となることを呼びかけていた。<sup>10</sup>

この円卓会議で、ダニーロフとヴォロブーエフは互いに共鳴しつつ、オールタナティブ論を唱え、歴史学の革新を求めたのである。彼らは、1990年代をともに歩むことになる。

『ソ連邦史』の編集部も、ペレストロイカの進展のなかで「19世紀末-20世紀初めのロシアの社会経済発展の論争的諸問題に関して」という円卓会議を企画し、その論争の提起者としてボヴィキン В.И. БОВЫКИН とヴォロブーエフの二人を挙げていた。ボヴィキンのやや長大な論文は、同誌1988年5号の「論争と審議」欄に掲載された。<sup>11</sup> このボヴィキン論文でも、またこの年に公刊された彼のモノグラフィでも<sup>12</sup>、1970年代以降のソ連歴史学の発展が「新傾向」批判のうえに成果ある発展を遂げたことが正当化されている。しかし、前年の2月24-26日にカザンで開かれた学術会議「大十月革命と内戦」で、「大十月社会主義革命史」学術会議の議長でアカデミー会員にしてソヴェト史学の長老И.И. Минツが長い間の行政的圧力の結果、研究は妨げられてきたとすでに公言し、70年代に中断された研究の再開を告げていた。<sup>13</sup> こうして、ボヴィキンら「70年代継承者」に対して「新傾向」の人々の主張が復興し、ペレストロイカのなかで優位に立つ状況が生まれた。6月9日の科学アカデミー歴史部会の党ビュロー定例会議では、1972年3月9-10日の歴史家会議で「新傾向」の研究を断罪した決定が16年ぶりに撤回・廃棄されることになる。<sup>14</sup>

1987年にはロシア革命70周年を祝うとともに、翌年にかけてスターリン批判が進展し、60-70年代初めの歴史研究への回帰が「新傾向」派の復権を中心に生じた。しかし、グラスノスチが進展するなかで、この状況は1989-91年にかけてさらにもう一回転し、ジャーナリズムの世界では、レーニン主義とポリシェヴィキ革命の否定へと論調は転移していった。1989年の東欧革命から1991年8月の「プッチ」、さらに12月のソ連解体へと急迫するなかで、いわばペレストロイカの後半期において、共産主義

10 Там же, С.35-39.

11 В.И. Бовыкин. Проблемы перестройки исторической науки и вопрос о «новом направлении» в изучении социально-экономических предпосылок Великой Октябрьской социалистической революции. «История СССР», 1988, №5, С. 67-100.

12 В.И. Бовыкин. Россия накануне Великих свершений. К изучению социально-экономических предпосылок Великой Октябрьской социалистической революции. М., 1988.

13 В.И. Бовыкин. Проблемы перестройки, «История СССР», 1988, №5, С. 96. Казань学術会議については、次を参照。《Вопросы истории》, 1987, №10, С. 115-121; 《История СССР》, 1987, №5, С. 214-222.

14 В Бюро отделения. «Вопросы истории》, 1988, №10, С. 175.

の過去が永遠に捨て去られるような雰囲気が生まれた。その後、マスメディアはソヴェト時代を全否定する多幸感にとらえられ、社会主義へのレーニン主義の道やネップの復権を提唱した学者や論客も、1992年末までにその多くが転向した。「自由市場＝民主主義者」が大きな勢力となり、1993年10月のエリツィンによる政変以降は、マスメディアと歴史研究において多元主義が確定し、ソヴェト体制下での共産党の統制による一元的な思想＝文化状況はついに終わった。<sup>15</sup>

ペレストロイカのなかで、全体として、このように歴史学は、「70年代継承者 наследник 70-х годов」<sup>16</sup> と「60年代人 шестидесятник」の対抗、そして後者の復権と優位のなかで緒に着くが、ダニーロフは、スターリン指導部による集団化の実施とコルホーズ体制の成立、その政治的抑圧と社会的矛盾について共産党機関紙『プラウダ』をはじめとする紙誌で自説を展開した。

1987年の夏には逸早く、ダニーロフの署名を付して「農村：社会主義への道 集団化の起源と教訓」が『プラウダ』（8月9日付け）に掲載された。ダニーロフはロシアの十月革命での土地国有化と1920年代の協同組合の発展を肯定的に描きつつ、1929年秋からこの発展が断ち切れ全面的集団化へと準備段階をへず、技術的準備もなしに直接移行が目指されたとする。そこでの多大な困難と犠牲をへて第二次五カ年計画期にコルホーズ体制が成立し、これは第二次大戦の試練に耐え抜いたとする。ここでは、コルホーズ体制の成立と発展における困難の主な根源は、農民の自発性に基づく協同組合のレーニンの組織原則が侵犯されたことに求められていた。そして、協同組合の多様な形態と民主化がペレストロイカの課題であるとして、彼は、次のようにこの論説を結んでいる。「我々の時代の実践活動は、確信をもって、コルホーズが科学技術革命と経済と社会＝政治生活の民主化という状況のなかで、即ち、我々がペレストロイカと呼んでいるもの全てのなかで、成功裡に発展できるということを示している。」<sup>17</sup>

翌年には、同じ『プラウダ』（8月26日と9月16日付け）に、ダニーロフと農業経済史家テプツォフ H. B. による談話「集団化：どのようであったか」が掲載されている。この談話は、集団化に関しては同紙の読者から相矛盾するような反響が寄せられ、それへ応答するかたちで企画されたとしている。その反響とは、一方で「上からの革命」による否定的な結果について、農民の土地からの、その生産と労働の成果からの疎外がもたらされたことが十分明確に述べられていないのではないかという意見であ

15 ソヴェト社会から新生ロシアへの文化・思想、歴史認識におけるこの急激な転換について、イギリスの研究者ディヴィスがまさに同時代的状況において具体的で多面的な分析をおこなっている。R.W.ディヴィス『現代ロシアの歴史論争』、1998年、viii, 5, 8-9, 11頁。

16 この用語はヴォロブーフが最初に使い、ついでボヴィキンが彼への反批判に際して肯定的に逆用した。В.И. Бовыкин. Проблемы перестройки... «Вопросы истории», 1988, №5, С.99; П. Волобуев, Великий Октябрь. «Наука и жизнь», 1987, №11, С.11.

17 В. Данилов. Деревня: путь к социализму. истоки и уроки коллективизации. «Правда», №221, 9 августа 1987 г., С.2.

り、他方では、集団化におけるスターリンの役割を一面的に、基本的に否定的に行っているのではないかという反響であった。ダニーロフらは、二回の連載のなかで、集団化の実施と結果に付いて詳細に数字をあげ事実をもって応えながら、スターリンによる全面的集団化がレーニ的な社会主義建設の理念に違背するものであり、ブハーリンのオールタナティブとしてのネップに依拠した方針を斥け、非常措置と広範な農民への暴力にもとづき、集団化の「テンポへの疾走」がなされ、これは被害以外もたらすことはなかったと指摘した。連載の第二記事では、特に、クラーク解体の規模や1932-33年の一連の地域での飢饉にもふれながら、農業生産の復興が1935-37年に始まり、コルホーズ体制が成立したと跡付けた。そして、大規模な集団農場が経済社会の進歩に向けて広い可能性を拓いたと確認し、その改革への展望を示していた。それは、コルホーズの勤労集団が「自主的な主人」として民主的な原理のうえに組織を再編し、コルホーズの指令=官僚的システムに取って代わるという展望であった。<sup>18</sup>

しかし、1988年末から、さらに大きな転換がはじまった。ソヴェト史学の「60年代人」と「70年代継承者」の両派の対抗を一举に押し流す動きが強まったのである。『科学と生活』は、何百万部と発行される学術啓蒙誌で、一年前にはタルノフスキー、ヴォロブーエフのロシア革命論を相次いで掲載し「新傾向」の新しい息吹を伝えたのであるが、同誌は1988年11月に、アレクサンドル・ツィプコの共産主義そのものを否定する論文「スターリン主義の起源」を掲載し、以降、翌年まで4回にわたって連載したのである。<sup>19</sup>

このツィプコ論文へは、二人の歴史家が反論を試みようとした。ヴォロブーエフとダニーロフである。しかし、彼らには反論が掲載されないことが告げられ、反論の機会を失っていた。<sup>20</sup> ツィプコをはじめとする反レーニン主義の自由民主主義派に対して、ダニーロフらが示した批判は、1991年夏の8月クーデターに際し緊迫した状況のなかでも展開された。このクーデター（「プッチ」）失敗の後には、ソヴェト史を全否定する論議が圧倒的な優位をもってマスメディアをとらえ、学界でも力を得た。そのような状況で、9月13日付けの『ブラウダ』に四名の署名を付した書簡が掲載された。

18 Коллективизация: как это было. «Правда», №239, 26 августа 1988 г., С.3 : №260, 16 сентября 1988 г., С.3. ダニーロフと談話に加わったテプツォフ Тепцов Н. В. (1944-) は、タムボフ州の農民の出で、1974年にモスクワ大学経済学部を卒業し、1920-30年代の農業史と弾圧された人々の名誉回復で活動してきた人物である。

19 А. Пыпко, Истоки сталинизма. «Наука и жизнь», №11(1988) С.45-55; №12(1988), С.40-48; №1(1989), С.45-56 ; №2(1989), С.53-61. 党中央委員会の国際部顧問ツィプコの共産主義を否定する論文がベレストロイカのなかで、4ヶ月にわたって連載された状況については、ツィプコ自身の回想がある。アレクサンドル・ツィプコ著 望月恒子訳『 Kommunismus との訣別』サイマル出版会、1993年、とくに第2章第1節「反共主義を選択した党機関」を参照。81,83-85,129,165頁。

20 R.W.ディヴィス『現代ロシアの歴史論争』、13頁。ディヴィスは「歴史論争」において「幾人かの歴史家はレーニン主義と革命および内戦期のレーニンの政策を力強く擁護したが、彼らの論説は概して思索に富み、非建設的なものではなかった」と評価している。ここに付した注には、ディヴィスが「民主主義的レーニン主義者」と呼ぶ人々が挙げられている。そこにダニーロフの名は見当たらないが、ダニーロフもこの潮流に属することは明らかである。R.W.ディヴィス、前掲書、24頁。



この四人のうち二人は歴史家のヴォロブーフとダニエーロフであり、彼らは嘗てツィプロコのマルクス主義批判への反論にいち早く乗り出していた。他の二名はともに哲学者で、哲学博士A.ブテンコとV.ケレであった。彼らは、十月革命を擁護し社会主義の理念の正統性を主張し、歴史家ディヴィスによると「少数派の知識人が決然として民主社会主義の旗を高く掲げた」のである。<sup>21</sup>

四人連名のこの書簡は、同紙の第二面に「きみたち、共産主義者はどこにいるのか」と囲まれた欄のなかに、「理念は禁圧できない」との小見出しと編集部解説を付して公表された。その解説文は、次のように述べている。「共産党に何十年と我々は生涯をゆだねてきた。その官僚機構に我々が大切にされることはなかった。8月19日から21日の反憲法的なクーデターは、党に破滅的な打撃を与え、我々にとって政治的破局であったと認めざるをえない。これは歴史的な所与であり、その否定も、その意義と結果を過小評価することも無意味であろう。」

Этот документ  
напечатан по  
инициативе  
редакции  
и редакционной  
коллегии  
журнала «Правда»

**ИДУН НЕЛЬЗЯ  
ЗАПРЕТИТЬ**

Мы, старые коммунисты, которые много лет  
работали в партии, но которые не  
были членами партии, не считаем  
за себя право  
запрещать кому-либо  
идти в партию.  
Мы считаем, что  
каждый человек  
должен иметь  
право выбора.  
Мы считаем, что  
партия должна  
быть открытой  
для всех.  
Мы считаем, что  
партия должна  
быть демократичной.  
Мы считаем, что  
партия должна  
быть честной.  
Мы считаем, что  
партия должна  
быть справедливой.  
Мы считаем, что  
партия должна  
быть прозрачной.  
Мы считаем, что  
партия должна  
быть доступной.  
Мы считаем, что  
партия должна  
быть открытой.  
Мы считаем, что  
партия должна  
быть честной.  
Мы считаем, что  
партия должна  
быть справедливой.  
Мы считаем, что  
партия должна  
быть прозрачной.  
Мы считаем, что  
партия должна  
быть доступной.

**ПИСЬМО В НОМЕР**

Ваше письмо, опубликованное в номере  
журнала «Правда», мы прочитали с  
интересом. Мы считаем, что каждый  
человек должен иметь право выбора.  
Мы считаем, что партия должна быть  
открытой для всех. Мы считаем, что  
партия должна быть демократичной.  
Мы считаем, что партия должна быть  
честной. Мы считаем, что партия  
должна быть справедливой. Мы  
считаем, что партия должна быть  
прозрачной. Мы считаем, что партия  
должна быть доступной. Мы считаем,  
что партия должна быть открытой.  
Мы считаем, что партия должна быть  
честной. Мы считаем, что партия  
должна быть справедливой. Мы  
считаем, что партия должна быть  
прозрачной. Мы считаем, что партия  
должна быть доступной.

**Где вы, коммунисты?**

Ваше письмо, опубликованное в номере  
журнала «Правда», мы прочитали с  
интересом. Мы считаем, что каждый  
человек должен иметь право выбора.  
Мы считаем, что партия должна быть  
открытой для всех. Мы считаем, что  
партия должна быть демократичной.  
Мы считаем, что партия должна быть  
честной. Мы считаем, что партия  
должна быть справедливой. Мы  
считаем, что партия должна быть  
прозрачной. Мы считаем, что партия  
должна быть доступной. Мы считаем,  
что партия должна быть открытой.  
Мы считаем, что партия должна быть  
честной. Мы считаем, что партия  
должна быть справедливой. Мы  
считаем, что партия должна быть  
прозрачной. Мы считаем, что партия  
должна быть доступной.

**В моральное подполье**

Ваше письмо, опубликованное в номере  
журнала «Правда», мы прочитали с  
интересом. Мы считаем, что каждый  
человек должен иметь право выбора.  
Мы считаем, что партия должна быть  
открытой для всех. Мы считаем, что  
партия должна быть демократичной.  
Мы считаем, что партия должна быть  
честной. Мы считаем, что партия  
должна быть справедливой. Мы  
считаем, что партия должна быть  
прозрачной. Мы считаем, что партия  
должна быть доступной. Мы считаем,  
что партия должна быть открытой.  
Мы считаем, что партия должна быть  
честной. Мы считаем, что партия  
должна быть справедливой. Мы  
считаем, что партия должна быть  
прозрачной. Мы считаем, что партия  
должна быть доступной.

**ВОПРОСЫ БЕЗ ОТВЕТА**

Ваше письмо, опубликованное в номере  
журнала «Правда», мы прочитали с  
интересом. Мы считаем, что каждый  
человек должен иметь право выбора.  
Мы считаем, что партия должна быть  
открытой для всех. Мы считаем, что  
партия должна быть демократичной.  
Мы считаем, что партия должна быть  
честной. Мы считаем, что партия  
должна быть справедливой. Мы  
считаем, что партия должна быть  
прозрачной. Мы считаем, что партия  
должна быть доступной. Мы считаем,  
что партия должна быть открытой.  
Мы считаем, что партия должна быть  
честной. Мы считаем, что партия  
должна быть справедливой. Мы  
считаем, что партия должна быть  
прозрачной. Мы считаем, что партия  
должна быть доступной.

**Объединение  
кредитно-финансовых  
предприятий**

Мы считаем, что объединение  
кредитно-финансовых предприятий  
является необходимым шагом  
для развития экономики.  
Мы считаем, что это позволит  
более эффективно использовать  
финансовые ресурсы.  
Мы считаем, что это повысит  
конкуренцию и снизит  
риски для вкладчиков.  
Мы считаем, что это будет  
полезно для государства.  
Мы считаем, что это  
способствует развитию  
экономики.

**Смерть излучает**

Мы считаем, что смерть  
является естественным процессом.  
Мы считаем, что каждый человек  
должен подготовиться к ней.  
Мы считаем, что это требует  
духовного развития.  
Мы считаем, что это требует  
честности перед собой.  
Мы считаем, что это требует  
справедливости по отношению  
к другим.

**Новая «Правда»**

Мы считаем, что новая  
«Правда» является важным  
шагом для демократии.  
Мы считаем, что это позволит  
более полно отражать  
мнение народа.  
Мы считаем, что это будет  
полезно для страны.  
Мы считаем, что это  
способствует развитию  
экономики.

**ПРОВЕРЬТЕ СЕБЯ**

Мы считаем, что каждый человек  
должен проверять себя.  
Мы считаем, что это требует  
честности перед собой.  
Мы считаем, что это требует  
справедливости по отношению  
к другим.

**Каждый сам себе банкир**

Мы считаем, что каждый человек  
должен быть своим собственным  
банкиром.  
Мы считаем, что это требует  
финансовой грамотности.  
Мы считаем, что это требует  
ответственности за свои действия.  
Мы считаем, что это требует  
честности перед собой.

**『Правда』 (1991年9月13日) 第二面に掲載された  
ダニエーロフら4名の声明 (письмо в номер)**

21 R.W.ディヴィス、前掲書、81-82頁、注41、414頁。共産党の中央機関紙『Правда』は、クーデター直後の8月23日から発行を停止し、8月31日に漸く再刊にこぎつける状況であった。

この書簡は、全文を翻訳すると以下ようになる。

「国家クーデターの企ては、ソ連共産党の内部から出たというだけでなく、そこで高い地位を占めている活動家たちによってなされたのである。だが、党中央の指導部は、何百万という平の共産党員に反逆者との闘いを呼びかけることはなかった。指導部は舞台裏で策謀にふけりながら、自らの恥を曝してしまった。我々にとって、党全体に疑惑の影がおよんだと意識するのは、とりわけ辛く痛ましい。

我々、平の党員は、危機的な日々共産党が無為であったことへの道義的な責任を自ら引き受ける。多くの平党員が叛乱との積極的な闘いに自発的に参加することによっても、一握りのプッチ主導者に対する圧倒的多数の党員の（実のところ）消極的ではあったが、しかし否定的な対応をもってしても、党組織を全体として救うことはできなかった。

共産党を襲った破局は偶然ではなく、当然のことであった。我々が期待していたのは、共産党が自らのなかに民主主義と自由、真に人道的な社会主義の理念に忠実な新しい党として再生する力を見出すことであった。まさにこれらの目標を志向する党綱領草案が公表されていた。しかし、党は全ての権限を持つ保守的な党機構のために社会の発展からどうしようもなく遅れており、その機構が党のペレストロイカを挫折させた。実際に、共産党は、結局、独占的組織（全体主義的な行政・指令システムの核心）から正常に機能する政党へと自ら改造することができなかった。とくに「民主主義を擁護する共産主義者」のような健全な改革派の流れは支持されず、反対に圧迫されたのである。党員大衆は、以前と同じく共産党の政策に影響を及ぼす可能性を奪われていた。

しかし、共産党とその党機構の政治的破産は、わが国における社会主義の理念の死滅を意味するものではない。言うまでも無く、共産主義と社会主義に反対する多くの人々は、現在まさにそのように考えているが、彼らは、相も変らぬ幻想と自己欺瞞におちいっている。

実際のところ、葬られたのは（そして、永遠に！と我々は期待しているのだが）、社会主義と党、国家性のスターリン・モデルである。しかし、理念としての、社会運動としての社会主義それ自体は、死滅してはいない。社会主義の理念は、社会=経済的不平等を生む土壤が存在する限り、人間の人間に対する搾取が存在するかぎり、人々が社会的公正の諸原則を擁護せざるを得ない限り、生き続けるであろう。社会主義の理念が現代の文明の発展全体に同伴しているというその事実から、のがれる事はできない。歴史をふりかえれば、十月革命は、社会的公正と自由への人民大衆の長きにわたる志向のあらわれであったし、ロシア社会の最も深刻な危機から国を救出する企図であったと、認めることができる。十月は社会主義の理念を、多民族からなる我々の国の歴史的運命と結びつけた。

革命の時代の記念碑を全て撤去し、レーニン及びそれに類する全ての博物館を閉鎖し、都市と街路の名を変え、日常や国家のシンボルを取り替えることはできる。しかし、俗な言いかたをすれば、運命からは免れえない。これが気にいろうといらすと、意味はない。社会主義の理念と原則は、歴史的な土壤に、我々人民のメンタリティと生活様式のなかに

根づいたのである。肝要なのは、－ 誤解しないでおこう － 長きにわたり熟し差し迫った私有化と市場関係への移行は、全ての人を所有者と富者にするわけではないということである。働く人々の利益は政治的に代表され、経済=社会的に擁護される必要がある。このことが、わが国に、自らに全ての左派勢力を含みこみ、社会的な公正と社会主義の理念を信じる、民主的で社会主義志向の党が必要とされるわけである。そのような党が、多くのかつての共産党員と新しいメンバーのエネルギー、知性と意志を統一することができる。それは、わが国とその全ての民族を脅かしている国民的な破局を未然に防ぐための、全般的な民主主義運動の構成部分とならなくてはならない。

議会=改革的な新しい社会主義の党の創設がかくも差し迫って必要とされる客観的起因が、さらにもう一つある。民主主義は影響力のある野党なくして、労働する人々を代表する左翼勢力なくして形成されないし、さらに強固になり、社会=政治の規範ともなりえない。その際、勿論のことだが、嘗ての共産党の復活は論外であり、その以前の信望をおとした原理主義的理念の定理を保持することや、また自らを汚した専従機構員については、問題ともならない。

社会主義タイプの新しい党を、現在の反共キャンペーンと多くの人々が狼狽している状況のなかで創設するのは、困難であり、おそらく危険がないわけではない。しかし、我々は左翼勢力の党、社会主義を志向する党、社会的公正を、自由と人間の尊厳、国民的合意を擁護する、効率的経済の創出と結びつける党をつくるという一連の共産党員の提案を支持する。

哲学博士 A.ブテンコ、 アカデミー会員 歴史学博士 P. ヴォロブーエフ、  
歴史学博士 V. ダニーロフ、 哲学博士 V. ケレ]<sup>22</sup>

この書簡の公表は「クーデター直後の2～3ヶ月間、ソヴェト時代に対して殆んど際限のない敵意が表明された」時期においてであり、共産党の理論誌『コミュニスト』も『自由思想』と名を変えて出さざるを得ない厳しい状況のなかでのことであった。<sup>23</sup> ダニーロフらは、この厳しい状況のなかで四人の連名で、自らの政治的立場を表明

22 A. Бутенко, П. Волобуев, В. Данилов, В. Келле. Письмо в номер. «Правда», 13-го сентября 1991 г. С.2. 哲学者ブテンコ (Бутенко, А. П. 1925-2005) は、第二次大戦に従軍し、戦後の1952年にモスクワ大学哲学部を卒業し、大学院で学んだ。哲学博士。ソ連の体制下で何度か「修正主義」の批判を受けたが、ベレストロイカのなかでゴルバチョフが参照・依拠した「創造的思考のマルクス主義者」の一人であった。A. ツィプコ『コミュニズムとの訣別』、108頁。もう一人の哲学者ケレ (Келле, В. Ж. 1920-2010) も大戦に従軍し、モスクワ大学哲学部を1944年に検定試験で修了している。1963-75年にソ連科学アカデミー哲学研究所に所属した。1973年3月の歴史学会議では、ヴォロブーエフが厳しく批判されたが、哲学の分野では彼も名指して批判されていた。Актуальные проблемы общественных наук на современном этапе. Стенограмма совещания по историческим наукам. (21-22 марта 1973 г.) М., 1974, С.113-4. 彼は科学アカデミー哲学研究所の史的唯物論部会の責任者であったが、この部会は歴史研究所と同じく解体された。Е. Г. Плимак. Русский термидор: измерение 1917 и 1985. «Век XX и мир», №2, 1996, С.217.  
23 R.W. ディヴィス、前掲書、73-74頁。

したのである。

この政治的立場は、1991年の八月事件を「国家クーデター」にして「反逆 мятеж」とし、その反憲法的性格を指摘し、それを企てた共産党の指導者や策謀に加担した人々を「反逆者 мятежник」「一揆主義者 путчисты」と軽蔑をこめて呼び、党指導部と専従機構員に対し、平の党員の立場から十月革命と社会主義の理念を擁護し、社会の発展に合致した「人道的な社会主義の理念」を掲げて、左翼勢力の新たな結集を呼びかけるものであった。

ダニーロフによれば、ペレストロイカのなかで再開した論争のなかで、1989年半ばまでは「60年代人」が論争を主導していたが、「見解と信念の崩落的転換」が訪れ、マルクス主義の公的な積極的イデオログが突然、マルクス主義の敵となる状況がうまれたと指摘し、彼はその特徴的な事例としてA.S.ツィプコを挙げている。ダニーロフは、1992年3月に、ツィプコが行った報告は、スターリン=ブレジネフ時代の「イデオロギー的摘発 разоблачение」とのみ比肩できる低劣なものであると厳しく批判するのである。これは、「ポリシェヴィズムの社会文化的起源と歴史的運命」と題した米露の研究会議でのツィプコのポリシェヴィズムのイデオロギーと実践に関する報告である。<sup>24</sup>

ペレストロイカのなかで歴史学の革新を求める先陣を切ったアフアナシエフをはじめツィプコら若い世代が革命とレーニンを否定し反共産主義の側に移行するなかで<sup>25</sup>、ダニーロフは十月革命と社会主義の理念を擁護したのである。ソ連崩壊から体制転換と、移行期における立場をこのように示しながら、ダニーロフは最後の闘いに入っていく。

## V. 最後の闘い

このようにしてペレストロイカのなかで始まった「60年代人」ダニーロフの活動は、1991年の8月の「プッチ」とそれに続く12月のソ連崩壊、1993年の十月政変、そしてこれらの政変と並行して進行するロシアの深刻な社会経済的危機、とりわけ農業の崩壊のなかで、展開していくことになる。

1990年代を通じてのダニーロフの活動は、まず、トロツキー、ブハーリンらの復権

24 В. П. Данилов, Современная российская историография: в чем выход из кризиса? «Россия в XX веке. Судьбы исторической науки», под общей ред. А. Н. Сахарова, М., 1996, С. 25-26. ツィプコは、哲学者ブテンコに対し、社会主義の理念と現実の社会主義としてのスターリン体制を引き離し、スターリン体制をテルミドール反動とみる論客として、名指しで、1988年にすでに批判していた。А. Цыпко. Истоки сталинизма. «Наука и жизнь», №11, 1988, С. 47.

25 1990年4月のモスクワでの歴史学国際大会で、アフアナシエフは十月革命以降の「全発展過程に対する攻撃を熱狂的に歓迎し」ていた。R.W.ディヴィス、前掲書、29頁。

と彼らの思想と活動の再検討にのりだしたこと、第二に、ソヴェト体制を否定する論調が風靡するなかでストリピン評価に対して厳しい批判で対応し続けたこと、第三に、ゴルバチョフのもとで始まりエリツィンに継承された農業改革に対して、一貫して批判的な対応を示したこと、第四に、これらの知的営為と結びついて「西」側の研究との積極的交流に乗り出したことである。これらの四つの分野での活動は交錯しながら、ダニーロフは1990年代から21世紀の初頭にかけて、「60年代人」歴史家のいわば「最後の闘い」を展開した。これは、ソヴェト史学の最終「幕」を飾るものであった。

第一の点に関しては、ディヴィスのいう「民主主義的レーニン主義者」は、ブハーリンとトロツキーの研究に向かった。1989-90年を通じて、ブハーリンからトロツキーと左翼反対派にいたる人々の政治的復権を目指して、彼らは論陣を張った。これは、1960年代にダニーロフらが主張した歴史学における「黙否法」批判の継続でもあった。とりわけ「異端者トロツキー」は、自由主義者からもロシア民族主義者からも侮蔑のなかにあり、ツィプコは、スターリン主義の起源を問い、その起源をレーニン主義およびマルクス主義に求めていたが、トロツキーと1920年代の左翼反対派の急進主義がペレストロイカにとって最大の危険であるとしていた。<sup>26</sup> トロツキーの重要な論文はソヴェトの雑誌にいわば試薬的に公表され、仏の研究者ピエール・ブルーエのトロツキー伝もシベリアのノヴォシビルスクの経済誌《エコヲロ》に、1989年の9、10号と紹介された。翌年の同誌第1号には、この公表をうけてトロツキーに関するダニーロフの論文「我々はトロツキーを認識し始めている」が掲載された。<sup>27</sup> ダニーロフは、ここで「反トロツキー症候群」とらえられてきた人々に対し、最後の名誉回復が求められている革命家としてトロツキーがいると指摘し、トロツキーの著作の解禁と研究、資料へのアクセスが可能となったとし、1989年をトロツキー研究開始の年としている。このトロツキー研究の開始を告げる論文は、すぐに英訳され西側に知られるとともに、日本でも翻訳紹介されることになった。<sup>28</sup>

26 R.W.ディヴィス、前掲書、25頁。ツィプコのトロツキーへの評価は、さしあたり次を参照。《Наука и жизнь》、1988, No.12, C.43。『科学と生活』誌の89年1月号では、スターリンの抑圧だけでなく、レーニンやトロツキーの赤色テロルも人民とロシアに対する犯罪であると論じていた。A.ツィプコ『コミュニズムとの訣別』、84-85頁。

27 В.П.Данилов, Мы начинаем познавать Троцкого (Послесловие к публикации глав из книги Пьера Бруэ "Троцкий"). 《ЭКО》1990, No.1(187), C.47-62. なお、このダニーロフ論文のすぐ後に、パンツォフがトロツキーとプレオブラジェンスキーを論じている。A.В.Панцов, Троцкий и Преображенский. там же, C.63-66. プレオブラジェンスキーに関しては、ゴリコフとツァクノフの研究が続いた。Гориков М.М., Цакунов С.В., Евгений Преображенский: трагедия революционера. 《Отечественная история》1992, No.2, C.75-95. トロツキー研究は、ロシアにおいて89 末に現れ、1990年に復権する。A.В.Панцов, Лев Давидович Троцкий. 《Вопросы истории》1990, No.5, C.65-87. 『社会学研究』誌も1990年の第5号でトロツキーを特集した。ヴァセツキーは、ここではトロツキズムとその「類似物-スターリニズム」とのむしろ近さを、そして両者のレーニンからの遠さを指摘している。Н.А.Васецкий. Социальные идеи Л.Д.Троцкого: размышления и споры. 《Социологические исследования》1990, No.5, C.23.

## V.P.ダニーロフ 再読 - 批判的継承に向けて - (II)

ダニーロフは、この論文で「反トロツキー症候群」の基礎となっている「スターリン神話」を克服することは、文書の公表と研究、討論という通常の方法でなされると述べていたが、また、1923年10月26日の党中央委員会と中央統制委員会の合同総会 - この総会は1920年代の左翼反対派による党内論争の最初の山場をなすが - でのトロツキーの演説について、スターリンの秘書バジャーノフの残したメモを党アルヒーフから全文公表することに尽力している。これは、ドイッチャーやブルーエの研究においても今まで知られていなかった文書の公開であった。<sup>29</sup>

ダニーロフのブハーリン復権への貢献はさらに大きい。彼は、スターリン体制の成立とともに研究対象から抹殺されたブハーリンに対しても「共感を懐きながら」、スターリンに反対し抵抗した人々の研究に向かっている。1988年にコーエンのブハーリン研究がロシア語に翻訳され、ブハーリンの完全な名誉回復がなされ、この年は彼の研究の解禁をしるす年であった。ダニーロフのブハーリン研究は、1917年の十月革命以降のソヴェト史全体を否定する新たな論調に対する批判でもあり、1917年の革命で問われたオールタナティヴとは異なる、1920年代のネップとそのオールタナティヴ論の提示であった。同時代の歴史論争を紹介し分析したW.ディヴィスが、ダニーロフの活動を紹介しながら、彼が「ブハーリンの見解に大いに共感を寄せていた」と確認しつつ、「1987-88年当時の典型的なネップへの無批判的な熱狂や、1990年の反レーニン主義者たちのネップ評価、すなわちネップを単に十月革命が全体主義に必然的に墮落することを阻止しようとして失敗した試みとして片付けてしまうような議論と比べれば、まだ皮相なものではなかった」と、多くのソヴェト史研究者の論議を評価したことにも注目しなければならない。<sup>30</sup>

ダニーロフは、1988年のブハーリン評価と翌89年末にはじまるトロツキー研究の解禁と推進に大きく貢献したのである。ペレストロイカのなかで、1987年秋にゴルバチョフが革命70周年の演説で、1920-30年代の社会主義建設をめぐる論争でのトロツキーとトロツキズムに厳しい批判を行い、ブハーリンとその「支持者たち」の誤りについて述べていたことからすれば<sup>31</sup>、また、1988年秋に、ヴォルコゴノフが『プラウダ』紙上でトロツキーを悪魔的に描いていたことを考えれば<sup>32</sup>、彼らへの認識は大きく進展したのである。

第二に、ストルィピン農業政策への評価に関しては、すでに1988年1月の歴史家円卓会議でダニーロフは「オールタナティヴ」論とも関連し厳しい対応をしていたが、

28 ヴィクトル・ダニーロフ、森田生也 訳「われわれはトロツキーを認識しはじめている - P.ブルーエ『トロツキー』翻訳によせて-」『思想』、1996年4月号。

29 Л. Д. Троцкий защищается. «Вопросы истории КПСС», 1990, №5, С. 32-43.

30 R.W.ディヴィス、前掲書、27-28頁。

31 М. С. Горбачев. Октябрь и перестройка: революция продолжается. «Правда», №307, 3 ноября 1987 г., С. 2.

32 Д. Волкогонов. Демон революции. «Правда», №253, 9 сентября 1988 г., С. 4.

これはロシア革命の認識とも関連している。ペレストロイカ後半に勢力を急伸させた「自由市場＝民主主義者」は、革命前の時代に関して一致した見解は持っていなかったが、殆ど全てがストリピン経済プログラムに共感を寄せていた。<sup>33</sup> ペレストロイカの後半には帝政時代の復権を求める動きが強まり、1991年4月26日にはモスクワで王政復活のためにロシア国民党の創設大会さえ開かれていた。1991年8月のクーデターとその失敗の後には、そのような状況のなかで、ストリピン改革における農民への武力鎮圧が擁護され、貴族＝地主の土地の「黒い割り替え」（総割り替え）がクラークの土地に対する「赤い割り替え」（革命による分割）と同じであるとして、否定される論調が生まれていた。<sup>34</sup> ニコライ・シメリョーフをはじめソヴェトの有力な知識人たちによって、ストリピン改革が1917年の革命に代わる好ましい選択肢であったという考えが主張されるようになり、1990年初頭までに、ストリピン改革が称揚され、ロシアの発展は十月革命によって悲劇的に中断されたとの見解が広まっていたのである。<sup>35</sup>

ストリピン改革の称揚と「赤い割替」への批判、さらに1920年代ネップの可能性への否定に対して、ダニーロフが提出したものが、1902-1922年を一貫した農民革命ととらえる農民論である。これは、当時の政治状況と歴史認識の変換のなかで好意的に迎えられことはなかったが、改革と革命の基奏底音をなすロシア農民への新たなアプローチであった。

ダニーロフのロシア農民革命論は、彼によると1992年に研究プランが策定され、翌年2月以降にそのプランに基づき作業が進められた。そして、1996年のタムボフでの研究集会の論集『権力と農民』のなかで、彼の農民革命論は明確な全体像が提示された。その論旨は、1902年のポルタワ、ハリコフ両県での農民蜂起にはじまり、1905-07年の農民運動のなかで自らのラジカルな綱領を提出し、これに対抗するストリピン改革を経て、1917年の革命のなかで展開する。革命のなかで、農民はポリシェヴィキに権力を委ねたが、1918年春から両者の対立が顕在化し、ソヴェト権力のもとで農民反乱が頻発し、1922年12月のロシア連邦土地法典の採択をもって農民革命は完了し

33 R.W.ディヴィス、前掲書、87頁。

34 同上、74頁。モスクワ大学の院生C.セリヴェールストフは「貴族も同じ人間だ！ ゲルツェンシュタインとストリピンに関する論説に寄せて」で、カデットの誤りを農民の私的所有の強化のかわりに地主地の収用という理念を出したことに見て、「貴族の土地の総割替（黒い割替）からクラークの（赤い割替）までは一歩とない」と論じた。客観的には、カデットはストリピンの政綱を支持すべきであったが、政治闘争という「運命のロジック」が全ての社会主義者だけでなくリベラルの大部分もストリピンに反対させたと論じていた。С. Селиверстов. "Дворяне - тоже люди! по поводу статьи о Герценштейне и Столыпине." «Независимая газета», 27 ноября 1991 г.

35 R.W.ディヴィス、前掲書、18-19頁；ディヴィスは、セリューニンらのストリピン農業政策と彼の政治家としての資質を称える論調に対するダニーロフの批判を、別の著作で紹介している。R.W.ディヴィス、『ペレストロイカと歴史像の転換』1990年、41頁。セリューニンの論考は、В. Селюнин, Истоки. «Новый мир», №5, 1988, С. 162-189. ダニーロフのストリピン改革称揚への批判は、次を参照。《Вопросы истории》, №3, 1988, С. 22.

たとする。ダニーロフは、ここで、しかし、農民の勝利は敗北に等しかったと指摘するのを忘れない。農民は自らの利益にかなう国家権力を創出できなかったからであり、民主的な可能性は内戦のなかで燃え尽き、苛酷極まりない暴力の衝突のなかから国家独裁が生じたからであると、結んでいた。<sup>36</sup> 彼のこのロシア農民革命論は、翌年夏にカラー刷りの大衆紙『ロシア』に同じ趣旨で掲載されている。<sup>37</sup>

ダニーロフが1996-97年に定式化したこのロシア農民革命論は、その20年に及ぶ自立した農民の闘争における一貫性と権力 - ソヴェト権力と共産党を含めて - との対立は、ペレストロイカのなかでダニーロフが提示した像を大きく超える内容であった。1987年には、ダニーロフは農村における二つの社会戦争論（農民の地主に対する第一の、農村プロレタリアートの農村ブルジョワに対する第二の闘争）にもとづき、1905年、1917年の二月、十月の三つの革命において第一の社会戦争が優越し、農民は反地主闘争において「土地国有化」の要求を提出したとまとめていた。<sup>38</sup> ボリシェヴィキ＝共産党の革命における戦略、政策の枠組みで農村での社会主義への移行を論じるという姿勢から、それを超え、彼の農民革命論は大きく踏み出したのである。

## VI. 農業改革への批判

「最後の闘争」における、第一のスターリン時代に「粛清」され、否定されていった人々の思想の復権を求めるダニーロフの活動、第二のストルィピンと帝政の「選択肢」への批判とともに、第三に、ゴルバチョフ＝エリツィンの農業改革に対する、ダニーロフの基本的批判の立場に注目しなければならない。この批判はストルィピン改革への評価とも関連し、それへの二重写しともいえるかたちで展開された。

ゴルバチョフは1991年8月のプッチに先立つ時期に、経済においては国家経済から私有化＝市場化を容認する混合経済へ向け、また、国家統合ではソ連のソヴェト主権共和国連邦への再編を提起して、クリミアのフォロスの別荘で休暇にはいった。彼は、その休暇にロシア史に関する研究書を携えていたが、それは、R. タッカーの『スターリン 権力への道』とA. Я. アヴレフのストルィピン研究に関する本であった。アヴレフの著書は、急進改革派のストルィピン改革への高い評価とは対照的に、むしろ、

36 В. П. Данилов. Крестьянская революция в России. 1902-1922 гг. «Крестьяне и власть». Материалы конференции. Москва-Тамбов, 1996, С.4-23. 「1902-22年のロシアにおける農民革命」という学術研究プランは、1994年に、ダニーロフとチャーニン編のタンボフ県におけるアントーノフ運動史料集の「前書きにかえて」のなかで提示されている。Крестьянское восстание в Тамбовской губернии в 1919-1921 гг. «Антоновщина», Тамбов, 1994, С.5-6.

37 Виктор Данилов. Не смей! Всё наше! Крестьянская революция в России. 1902-1922 годы. «Россия», №7, июля 1997 г., С.15-19.

38 В. Данилов. Октябрь и аграрная политика партии. «Коммунист», №16 (ноябрь) 1987, С.31.



それに対抗して改革の失敗と帝政崩壊の運命を主張する内容であった。<sup>39</sup> 夏の休暇と読書は8月18日に乱暴なかたちで中断されたが、ゴルバチョフがストルィピン改革への関心を懐いていたことに留意する必要がある。

書記長ゴルバチョフ自身は、北カフカースのスターヴォロポリ地方に農民の子として生まれ、戦後は機械トラクター・ステーション (MTC) のコンバイン助手として働き、モスクワ大学法学部を卒業し、スターヴォロポリの農業研究所を修了し、一貫してこの穀倉地方の党農業部門で活動していた。彼がここを離れ、党中央委員会書記になるのは1978年11月である。彼はブレジネフ体制の末期とアンドロポフ書記長のもとで、農業担当の書記にして政治局員として停滞と危機に陥ったソ連農業に対し、食料増産と農業改革のプランを策定していた。<sup>40</sup> この彼によってペレストロイカのなかの農業改革も着手されていくのである。

ダニーロフはペレストロイカのなかで共産党および政府指導部の農業政策への参与を求められるが、そこで構想され推進が目指された農業政策への批判を強めていくことになった。政策への参与が求められた背景には、1965-68年に農業集団化研究への党の統制に彼が強く抵抗したことがあったし、また、スターリン主義のもとでの集団農場の形成とその運営への彼の批判的立場からでもあった。しかし、党と国家の指導部は、大規模な集団農場それ自体を批判し、私的所有制の導入を目指す方向へ進んでいった。彼は、自らの置かれた状況を、後に次のように述べている。

「新しい農業改革案の策定過程で、私に、集団化の実施に際してのスターリンの強圧や、コルホーズ農産物の国家への供出義務としてまだ保持されているスターリン体制の残存などではなく、大規模な集団農場そのものへの非難が期待される状況に一度ならず出くわした。時には、直接、土地の国有化を非難し、私的土地所有の導入などを要求して発言することが提案された。これらの場合に、私には、ああ、党指導部の期待に応えることはなかったのだ。」<sup>41</sup>

ダニーロフが党と政府の農業政策に関与することになったもう一つの背景には、農業アカデミー総裁A.A. ニーコノフとの交友関係もあった。ニーコノフとはチャーノフの復権を一緒に進め、農業政策でも同じ考えを持っていた。農業改革でも彼と連絡を取りあい、行動を共にするという背景があった。<sup>42</sup>

39 R.W.ディヴィス、前掲書、64-65頁。А. Я. Аврех. П. А. Столыпин и судьбы реформ в России. М., 1991.

40 ミハイル・ゴルバチョフ著(工藤精一郎・鈴木康雄 訳)『ゴルバチョフ回想録』上巻、新潮社、1996年、232-250、258-264頁。М. Горбачев, Актуальные вопросы сельского хозяйства и его эффективности. «Коммунист», №11, 1980, С.36-49; Его же, Продовольственная программа и задачи её реализации. там же, №10, 1982, С.6-21; Его же, Аграрная политика КПСС на этапе развитого социализма. // М. С. Горбачев, Собрание сочинений. Т. 1, М., 2008, С.378-391.

41 Данилов, В. Из истории «перестройки» (переживания шестидесятника-крестьяноведа). // Новый мир истории России. М., 2001, С.415.

## V.P.ダニーロフ 再読 - 批判的継承に向けて - (II)

ダニーロフは、ベレストロイカのなかで始まった農業政策に危惧を覚え、1988年秋には、党=政府の農業改革案に対する覚書を作成する。この覚書は、10月22日付で「ソ連共産党の現段階における農業政策の構想と国内の食料確保のための緊急措置に関する覚書に寄せて」と題して、タイプ印刷で4部作成され、「緊急措置に関する覚書」の作成者に配布され、ダニーロフの手許には手稿だけが残った。この「覚書に寄せて」のなかで、彼は農業政策=改革に関する自らの基本姿勢を示し訴えたのである。

ここで、ダニーロフは、農業改革は集団農場を私的な、ましてやクラーク経営に取り替えることでも、土地の国有化を放棄することでもないと言明し、ソヴェト農村が疲弊から回復し、都市から農村への人口回帰と農村での総合的職業教育なくして、「ファーマー」への転生は不可能と指摘し、この移行の際に勤労集団に「真の自治」をあたえ、協同組合としてのコルホーズが活性化することに期待を表明している。そして、レーニンの協同組合の発展にソヴェト社会の革新をみて、次のように、この「覚書に寄せて」は結んでいた。「このようにして、協同組合的な社会=経済構造が生まれる。その創造と発展は.....我々の社会を、文明化された協同組合の体制としての社会主義というレーニンの理念の実質的な実現の道に立たせるであろう。」<sup>43</sup>

農業改革に関する議論は、1989年以降は鋭さを増し、私的所有を基礎に農業を改革し、ファーマー経営を育成することが喧伝されたと、ダニーロフは指摘している。1989年末には、農業改革における「非国家化 разгосударствление」では今やあまりにも穏便にすぎるとみなされる状況が生まれており、1990年初めに党中央委員会に農業改革問題委員会 Комиссия ЦК КПСС по вопросам аграрной реформы が付設されると、ソヴェト農業の改革をめぐる構想は急速に亢進していった。この委員会の長には形式的に書記長ゴルバチョフが就いたが、実質的な指導者は、当時中央委員会で農業担当の書記ストローエフ E. C. Строевであった。この委員会には農学者、経済学者、法律家が専門家として参加したが、歴史家として参加したのはただ一人、ダニーロフであった。<sup>44</sup> この委員会が、ソホーズ・コルホーズというソ連農業の基本制度から、私的土地所有を認め農民（ファーマー）経営の育成と発展へと政策転換を進める

42 Там же, С.415-416. 1920年代に農民経営の研究に従事したチャヤーノフ、コンドラージェフらは「勤労農民党」事件で告発され粛清されたが、彼らの名誉回復にダニーロフは努め、1987年7月16日のソ連最高裁決定でチャヤーノフらの名誉回復がなされていた。奥田央「ソ連研究とダニーロフ氏」『朝日新聞』1987年12月7日、夕刊。同、「ダニーロフ」『20世紀の歴史家たち(3)』刀水書房、1999年、347頁。ダニーロフのチャヤーノフ論は、次の論文を参照。В.П.Данилов, Русская революция в судьбе А.В.Чаянова. <Крестьяноведение>, ежегодник 1996, М., 1996, С.96-132.

43 Данилов, В. Из истории «перестройки», С.416-419.

44 Там же, С.420. ストローエフ E. C. Строев は、1937年にオリョール州でコルホーズ農民の家族に生まれた。1958年に入党し、1960年に果樹野菜専門学校を、1969年に党中央委員会付属の党高等学校を修了している。同州の党コルホーズ部門で活動し、1973-85年は州党委員会書記を務め、1985年から同第一書記となり、翌86年から党中央委員会メンバーとなり、89年9月の中央委員会総会で中央委員会書記に選出されている。Полиتبюро, Оргбюро, Секретариат ЦК РКП(б) - ВКП(б) - КПСС. Справочник. М., 1990, С.225.

ことに対して、ダニーロフは私的な農民経営ではなく、集団農場を「真の協同組合」へ再編することを主張し対抗したのである。<sup>45</sup>

この委員会の初会合は、1990年8月23日に行われることになった。ダニーロフはこの会議の数日前から、農業アカデミー総裁ニーコノフと連絡を取り、〈非国家化〉を農業改革全体の基礎とすること、崩落的な結果をもたらしかねない改革に警告を発する、少なくとも制限するというので、二人は一致した。しかし、8月23日の会議そのものは予期せぬ方向に進展し、会議を取り仕切った党中央委員会の農業部長スキーバИ.И.Скибаによって、共産党=政府の改革に同調するものしか発言は許されなかった。この会議で、シメリョーフН.П.Шмелевは土地の国有化を私的土地所有に変えることを訴えた。スタロドゥーブツェフВ.А.Стародубцевは、書記長への意見や提言に対し組織的な「圧力」がなされたことを示唆した。書記のストローエフと総裁のニーコノフは、自らの発言のなかでは土地については全く言及せず、ファーマー経営には試みとして触れるにとどまった。ゴルバチョフは開会に当たり、ストルィピンが有していたような土地改革の手段が彼にはないと嘆き、参加者の多数は聞き手にとどまっていたが、会議で発言した人々はゴルバチョフとこの感情を共有しており、私的土地所有の導入は不可避であると請合ったのである。会議で発言を認められなかったダニーロフは、発言のため準備した覚書を残している。<sup>46</sup>

この覚書は1990年8月23日付けで、「農業改革について Об аграрной реформе」と題され、2-3日前にタイプでうち準備していたものである。この「農業改革について」のテキストは、一昨年(1988)の10月22日付けの「覚書に寄せて」と基本思想において同じである。ここでは、所有権の私有化は、それ自体は多様な生産形態と集団経営にいたるまでの協同化を排除するものではないとして、私有化を容認しつつ、あくまで改革の方向は「非国家化」にあるとし、経済を非国家化し市場に委ねることは、勤労集団に「真の自治」を与えることであると主張する。ついで、ダニーロフは「上からの農業改革の促進」に対し、スターリンによる集団化の結果を想起させ、またストルィピン改革における強制力を指摘して批判し、改革には一連の農業社会政策が必要であるとす。これは、1988年秋の「覚書に寄せて」での提言と重なる) そのうえで、農業改革は小農民経営に戻るのではなく、大生産の現代的形態への移行であると主張する。ダニーロフは、現代の農村には「望み、可能で、許される」農民のために、

45 Куда идет Россия? Альтернативы общественного развития. Вып.2.1995,С.327-8.

46 Данилов,В. Из истории «перестройки»,С.421.ロシア農業連盟総裁のスタロドゥーブツェフは、農業改革についてはダニーロフと同じ立場であった。彼の立場は、1995年2月初めにモスクワで開かれた「農業改革：結果と展望」全ロシア会議での発言から判定できる。ここでスタロドゥーブツェフは「指導者は農民の声を聞いていない」と指摘し、「多くの現在の困難は、ゴルバチョフのペレストロイカ時代における農業問題の誤った方針によって生み出されたものであった」と明言している。社団法人国際農業協力協会『「農業改革：結果と展望」に関する全ロシア科学・実践会議について』1995年3月、19頁。

今、法的、経済的条件がまず作り出されねばならないと認めつつ、だが、改革は全体として「働き手である基本的な大衆、農業全体を考慮に入れねばならない」と指摘するのである。<sup>47</sup>

このダニーロフの農業改革によせた文章は、1988年に始まり90-91年には最高潮に達したストリピン称揚のなかで作成された。ダニーロフによると、ある中央紙は1991年5月12日付けで「ストリピンとゴルバチョフ：〈上からの〉二つの改革 Столыпин и Горбачёв: две реформы «сверху»」という翼賛記事を掲載し、ストリピン称揚文献の溢れんばかりの状況のなかでのことであった。

ダニーロフはこのような状況のなかでの二人のストリピン研究者の苦境を、自らとの関係のなかで、我々に開示している。二人はこの時期に共に研究書を公刊しようとしていた。アヴレフ A.Я. とアンフィーモフ A.M. である。二人は歴史研究所の党委員会で書記を務めるダニーロフと、1960年代に活動を共にしていた。<sup>48</sup> アヴレフは、自著の公刊に際しダニーロフに編集者となり前書きを寄せてくれるように依頼していた。原稿は、すでに、1988年12月に彼が死去するまえに出版社に持ち込まれていたのだが、その内容がストリピン称揚には違背するものであったため、出版は3年以上にわたって延び、その内容も新しいイデオロギーに沿わないところは編集部によって削られていた。ダニーロフは、このような歪められた形での出版に賛同できず、前書き「アヴレフの著作と現代のストリピン文献（编者より）Книга А.Я. Авреха и современная столыпиниана (от редактора)」を認めた。しかし、この前書きは出版社に受け入れられず、アヴレフの研究書は別の编者のもとで上梓された。<sup>49</sup> 新編集部は、出版に際してダニーロフらの支援に謝意を伝えつつも、「著者[アヴレフ-引用者]の考えに同意できないことがある、しかし、その整然たる、具体的な膨大な資料による強靱さには然るべき評価をしなければならない」と、付記したのである。<sup>50</sup>

もう一人の歴史家アンフィーモフは、ストリピン称揚のなかで最後の研究成果をついに世に問うことができなかった。アンフィーモフは「新傾向」を代表する一人として70年代以降、自己批判を強いられ、不遇のなかにあったが、1991年にはストリ

47 Данилов, В. Из истории «перестройки», С.421-423.

48 Партийная организация Института истории АН СССР в идейном противостоянии с партийными инстанциями. 1966-1968 гг. «Вопросы истории», 2007, №2, С.51, 59, прим. 5.

49 Данилов, В. Из истории «перестройки» С.424. アヴレフの著作は『ストリピンとロシアにおける改革の運命』（А.Я. Аврех. П.А. Столыпин и судьбы реформ в России. М., 1991.）のタイトルで、91年6月に5万部が出版された。ちなみに、ゴルバチョフがこの年の8月に休養先のクリミアに携えたのは、この著作である。アヴレフ A.Я. (1915-1988) は、タムボフ県のキルサノフ市に生まれ、モスクワ大学史学部を卒業し、師はシードロフ A.A. である。第二次大戦に従軍し、スターリン批判後、ソ連科学アカデミー歴史研究所の研究員としてストリピン帝政期の研究を専門とした。1960年代には「新傾向」の一人でもあった。1988年12月28日に死去した。С м., «Вопросы истории», 1989, №3, С.190.

50 А.Я. Аврех, П.А. Столыпин и судьбы реформ.... С.6.

ピン改革に関する研究作業を漸くまとめ終えた。そのタイトルは『血塗られた改革 Реформа на крови』であったが、出版社は書名の変更を求め、当たり障りのない『ストルィピンとロシア農民 П. А. Столыпин и российское крестьянство』とタイトルを改めたが、この草稿を受け入れる出版社は一つとしてなかった。<sup>51</sup> また、ソヴェト体制のもとシリーズで公刊された史料集『ロシアにおける農民運動19世紀—20世紀初め』のなかで、最後まで未刊であった1901-1904年に該当する巻は、アンフィーモフの死後、ようやく1998年に編者アンフィーモフを黒棒で囲って公刊された。ダニーロフはこの巻に「前書き」を寄せ、「新傾向」に属する彼の研究を評価し、彼の編集になる農民史料集が20年間にわたり手稿のまま放置された背景に「イデオロギー的(行政的) ポグロム」を指摘したのである。<sup>52</sup>

さて、ダニーロフは、ストルィピン農業改革に関して「リベラル=民主派」が祖国の歴史を全く知らないし、知ろうともしないと厳しく批判しながら、ロシア共和国のエリツィン指導部が1990年11月22-23日にロシア最高ソヴェトで事実上審議することなく、「農民(ファーマー) 経営に関して」と「土地改革に関して」の二つの法案を採択させたと指摘する。このような状況のなかで、ダニーロフは共産党中央委員会の新綱領検討委員会に向けて、始まった農業改革に対する自らの認識と農業生産の崩壊を防ぐ措置を提言するために「覚書 записка」を作成した。1991年3月24日付けの「ソ連共産党綱領農業部門への覚書 записка к аграрному разделу Программы КПСС」と題した文書である。

この新綱領の農業部門へ寄せた「覚書」は、前年8月23日付けの覚書「農業改革について」と基本的に同じ内容である。ペレストロイカの目標は農業における「非国家化」であるとし、土地所有の私有化とは協同組合形態を含め多様な経営形態を排除するものではないとし、コルホーズ・ソホーズに対するさまざまな国家規制を排除し、勤労集団に「真の自治」を委ねること、農村での一連の社会政策が移行措置として必要であると提言し、農業改革は小農民経営に戻ることでないと主張した。<sup>53</sup>

ダニーロフは1988年10月22日の「覚書に寄せて」に始まり、1990年8月23日の「農業改革について」で、ゴルバチョフのもとで始まった農業改革の方向を「非国家化」とレーニンの協同組合の発展に見出し、ゴルバチョフ=エリツィンの進める国有化解除と土地の私有化、農民(ファーマー) 経営の形成への方針とは対立する「改革」を提言したのである。ここでは、「60年代人」として反スターリン主義のなかで形成

51 Данилов, В. Из истории «перестройки», С.425; Анフィーモフは1995年10月末に死去するが、彼の研究の最も重要な部分である1912年の大規模な農民調査に基づく資料の分析は、ダニーロフとシャーニンの編集する『農民研究』に掲載された。Анфимов А.М., Новые собственники (из истории столыпинской реформы). «Крестьяноведение. Теория. История. Современность.», М., 1996, С.60-95.

52 А.М.Анфимов(ред.) Крестьянское движение в России в 1901-1904 гг. М., 1998. С.5-6.

53 Данилов, В. Из истории «перестройки», С.426-428.

V.P.ダニーロフ 再読 -批判的継承に向けて- (II)

されたダニーロフの見解が、1990年代の新しい状況のなかで練り直され提起されているといえよう。

(以下、次号につづく)